平成２７年度第２回広島市立図書館協議会 会議要旨

日　時	平成２７年９月８日（火）　午前１０時～正午		
場　所	中央図書館　３階セミナー室		
公開・非公開の別	公　開	傍聴人	なし
出席者	委　員：重森委員、竹川委員、岡田委員、志々田委員、池田委員、長谷委員、竹澤委員、林委員、松本委員 事務局：林生涯学習課長、清水中央図書館長、藤井中央図書館副館長、野口中央図書館事業課長、片山こども図書館長、神田中区図書館長、中東区図書館長、的場南区図書館長、角田西区図書館長、冨中安佐北区図書館長、小川安芸区図書館長、重藤佐伯区図書館長、上田湯来河野閲覧室長、烏田まんが図書館長、植田あさ閲覧室長、島筒指導第一課長		

議　事（会議要旨）

１　開会

２　議事

⑴　平成２６年度事業について

資料１に沿って中央図書館副館長が説明を行った。

⑵　子どもの読書活動推進計画（第二次）の評価について

資料２及び資料３に沿って生涯学習課長が説明し、質疑応答を行った。その概要は、以下のとおりである。

（池田委員）

障害者差別解消法という法整備があったこともあるが、障害のある子どもや病弱な子どもの読書環境の充実について第三次計画における取組の方向性の中に位置付けている点が評価できる。また、４か月児健康相談時における読み聞かせは、高い受診率（９６％）のもとで行われており、今後も継続するよう願っている。１歳６か月児健康診査時にも同様に読み聞かせが行われるとよい。

（こども図書館長）

これまでも、障害を持つ子どもや病弱な子どもの読書環境の充実に取り組んできたが、第三次計画の中でもしっかりと位置付けて、職員が自覚した上で、より一層の充実に取り組んでまいりたい。

（長谷委員）

地元の小学校であったオープン参観日で、ボランティアによる読み聞かせが行われている様子を参観した。子どもたちが目を輝かせながら集中して聴いている姿はとても素晴らしいと感じた。しかし、その後、その学校の図書室を訪れたが、室内は暗く、この本を借りたいなと思えるような展示ではなかった。読み聞かせに使用した本や関連する本を展示したり、教員が図書館の利用を促すような言葉かけなどのフォローを行えば、図書への関心がより高まるのではないかと感じた。

（重森委員）

学校図書館担当事務職員は、区内の小・中学校を訪問し、学校図書館の充実・改善に向けてボランティアの指導などに当たっているが、学校図書館担当事務職員が配置されている学校と配置されていない学校とでは、学校図書館の充実度が異なっている。第三次計画の取組の方向性として、「学校図書館担当事務職員の配置等の検討」が掲げられているが、どのような検討を行う予定なのか伺いたい。

（指導第一課長）

８人の学校図書館担当事務職員が市内全校をカバーするのは限界があると感じており、検討課題として受け止めている。学校司書の配置状況では、広島県・広島市とも全国平均に比べて配置割合が低くなっている。配置している県・市をみると、雇用方法や時間など、それぞれ配置の仕方が異なっているため、どういう配置の仕方がよいのか、教育委員会内で検討しているところである。一方で、平成２９年度に教職員の県費から市費への移管が予定されており、職員全体の配置の中で見直し・検討を行っていく必要がある。第三次計画の中で、「学校図書館担当事務職員の配置等の検討」を重点取組として位置付けることとしており、今後の検討状況については、当協議会にもお知らせする。

（岡田委員）

「学校等における子どもの読書活動の推進」では、幼稚園・保育園での取組の成果が上がっていることが分かるが、小学校での取組の成果が見えてこない。自分は学校図書館ボランティアとして活動しているが、授業に関することはボランティアの役割ではないと考える。学校図書館を学習・情報センターとして活性化させていくためにも、学校司書の配置が重要である。また、読書習慣を身に付けることは、人間として豊かに生きていくために重要なことである。広島市の学校が、どのような子どもを育てたいのか、どのような学びをさせたいのか、目指しているところを明らかにして、読書活動の推進に取り組んでいってほしい。

（指導第一課長）

ボランティアの方には、特に、小学校低学年児童への読み聞かせで活動していただいている。幼稚園年長から小学校低学年にかけては、将来にわたる読書習慣につながる力を養うためにも「読む」機会がとても大事であり、高学年・中学生になっていくと、「調べ学習」も大事になってくる。学校の教員だけでは難しいことをボランティアの方の協力を得ながら取り組んでいることも多く、学校司書のことも含めて、今後検討をしていかなければならない。学校図書館の環境整備についても、学校間による差が生じていると認識している。学校長にも働きかけ、学校図書館の充実に努めてまいりたい。

（志々田委員）

図書館が行う「調べ学習の支援」で、図書セットの内容に学校側のニーズを反映できていないという課題が挙げられていたが、どのようにニーズがあっていないのか。読解力や判断力などの基礎学力につながる調べ学習のウエイトが、今後さらに高まっていく。調べ学習を各教科の中でどう進めていくのか、支援セットを用いて授業の中でどのように展開するのか、司書教諭だけでなく現場

の教員に対する研修を行う必要がある。資料のことに詳しい図書館が教材開発などにも積極的にかかわっていくことも、今後は必要になってくると思う。

（こども図書館長）

調べ学習用の図書セット貸出は、現在、５３テーマ・７４セット（１セット約３０冊）を用意して、リストを各学校へ配付するとともに校長会でも説明を行っている。平成２６年度は４７件の貸出実績があり、セット返却時に回収するアンケート調査では、借りた資料については活用できたとの回答が多かったが、学校現場の意見を広く聞き、もっとＰＲして利用を促進したい。

（中央図書館副館長）

こども図書館長の説明に補足するが、調べ学習を進めていく上で、図書館資料と司書教諭や教員、子どもたちとをつなぐ学校司書が大事であるということが、学校図書館法の改正の中で述べられている。現場の先生や子どもたちの声を反映した図書セットとなるように、現状では学校図書館担当事務職員、将来的には学校司書に図書館資料と司書教諭や教員をつなぐ役割を担ってもらいながら、連携を進めていきたいと考えている。

⑶　子どもの読書活動推進計画（第三次）の骨子（案）について

資料４に沿って生涯学習課長が説明し、質疑応答を行った。その概要は、以下のとおりである。

（指導第一課長）

当日資料として、『平成２６年度「学校図書館の現状に関する調査」結果について（概要）』を配付している。学校司書の配置状況については、公立小・中・高等学校いずれにおいても、広島県は全国平均を下回っている。先ほども述べたが、今後、配置について検討していく。

（松本委員）

年齢が上がると本を読まなくなる傾向があるという中で、公民館との連携で何か取組ができないか。自分は公民館図書ボランティアとして大人向けの読書講座などに携わっているが、例えば、公民館で、ボランティアと協働して、試験週間でない土日に、中・高校生向けの朗読会を開催するなど、青少年向けの事業を地域で展開していく必要もあると思う。

（竹川委員）

自分の勤務する小学校では、「基礎・基本」定着状況調査で、１か月に１１冊以上本を読むと回答した児童が４人に１人の割合であった。ボランティアによる学校図書館のリニューアルに取り組んだほか、並行読書や調べ学習、図書セット貸出など、あらゆることに手を尽くして取り組んできた結果、成果が上がってきている。一方で、１か月に１冊も読まないと回答した児童が１０人に１人おり、読む子どもと読まない子どもとの格差が広がっている。

魅力ある学校図書館づくりには、学校図書館担当事務職員が不可欠である。それは、読みたいときに子どもが学校図書館にふらっと立ち寄っても、本をすすめたり、子どもが調べたいことにこたえたりすることのできる図書館の本に精通した人がいることで、子どもにとって本がもっと身近になるからである。

また、学校図書館の蔵書整備に関しては、内容的に古くなったりしている図書資料の入替に係る図書購入予算が必要である。特に、百科事典は高額であり、購入に係る予算をつけてほしいし、これを授業で活用するという意識を高めるための校内研修の充実にも取り組む必要がある。

夏休み明けに、マララ・ユスフザイさんの国連演説から考える写真絵本『ぼくたちは　なぜ、学校へ行くのか。』を、各学級で担任による読み聞かせを行った。学校として読書活動の取組成果を上げていくためには、学校内での意識統一を図っていくことも大事である。本年度、学校図書館賞（公益社団法人全国学校図書館協議会主催）を受賞した彩が丘小学校の実践事例なども参考にしながら、読書活動の推進、学校図書館の充実に向けて、学校としてどう取り組んでいくべきなのか、しっかり考えていく必要がある。

（指導第一課長）

これまで、本市の施策として、特別支援教育アシスタントや、不登校児童生徒への支援を担当するふれあいひろば推進員の配置に重点を置いて取り組み、学校を支援してきた結果、成果を上げてきており、同様に成果を上げるためにも、今後は、学校司書も含め、学習を支援する人の配置について、教育委員会全体で検討していくことになると思う。当協議会でいただいた学校図書館事務担当職員の配置等についての御意見をもとに、検討を行ってまいりたい。

百科事典等の整備では、１冊当たりの単価が高額であり予算上の制約もあるが、良い資料を学習に取り入れていけるよう、校長会でも意見をもらいながら整備を進めてまいりたい。

（林委員長）

図書館が学校・学校図書館への支援を推進していく上で、ニーズを掘り起こすことが大事になってくると感じている。よかれと思って提供していることがミスマッチになっていないか、確認していただきたい。また、図書館と公民館との連携でも、公民館側のニーズを掘り起こし、連携による取組を推進していただきたい。

学校では、学級数が１１学級以下で司書教諭が配置されていない学校図書館の整備をどう進めていくのかについても、あわせて検討をお願いしたい。

（岡田委員）

広島市内の学校は、竹川委員が関わられた彩が丘小学校のような学校図書館を目指したいと思っていると思うが、それに近づくことができないのは何故かを真剣に考えていただきたいし、学校担当事務職員の配置の有無によって、学校図書館の状況に差が生じるようなことがあってはならない。公立の学校であれば、どの学校でも同じような環境の下で学ぶことができる学校図書館であってほしいと切に願っている。学校での読書活動の全体計画・年間指導計画の見直しでは、教育委員会から学校長に対して、各学校における図書・読書の位置付けについてしっかり考えて見直しを行うように働きかけていただきたい。

竹川委員のように長い間学校図書館に関わってこられた方に、図書アドバイザーになっていただき、市立学校全体に助言してもらうという仕組みがあったらよいのではないか。関係機関の連携が大事であるが、連携の中で、今後、学校図書館支援センターのようなものが設けられれば、学校図書館全体の状況を把握し、改善に向けた取組を推進していくこともできるのではないか。

（竹澤委員）

目標（１か月に１冊以上の本を読む子どもの割合を増やす。）の達成に向けて、具体的にどう取り組んでいくのか。学校の規模（学級数）によって、本を読む子どもの割合に異なる傾向が見られるのか。

（指導第一課長）

学校の規模によって異なるということではなく、読書活動に関する取組方法が学校によって異なることや、研究教科を特定し力を入れて指導を行う学校があることなどが影響していると考えられる。

（志々田委員）

読み聞かせボランティアとして活動している人は、地域によって人数に多い少ないといったことがあるのか。ボランティアの希望などもあると思うが、ボランティアとの協働によって取組を推進するのであれば、活動しているボランティアの人数が地域によって偏在することなく、全市域まんべんなくいる状況が好ましい。

（こども図書館長）

こども図書館が養成した読み聞かせボランティアは、各区の保健センターや図書館などで活動してもらっているが、地域別人数については、本日は持ち合わせていない。このほか、学校や公民館で活動している人を対象としたボランティア講座も開催しているが、これらのボランティアの地域別人数は把握していない。市内で子どもの読書活動を推進しているボランティア団体・個人のネットワーク「ほんはともだちネットワーク」という組織があり、このネットワークに加入している団体・個人の状況についてはある程度把握できる。

（林委員長）

子どもにとっての読書活動は、豊かな人間性、確かな学力を育む上で、大きな役割を担っている。各学校によって状況や課題が異なることから、教育活動の中での優先順位を見直しながら取組を進めていくことが大事である。

⑷　「その他」について

本年１０月１日の稼働に向けて再構築を行っている図書館コンピュータシステムについて、当日資料として『広島市立図書館　新システム　どう変わる？Ｎｅｗｓ　vol.１～３』を配付し、中央図書館副館長から概略を説明した。

３　閉会

（事務局）

次回協議会は、１１月に開催したいと考えており、後日、日程調整をさせていただく。